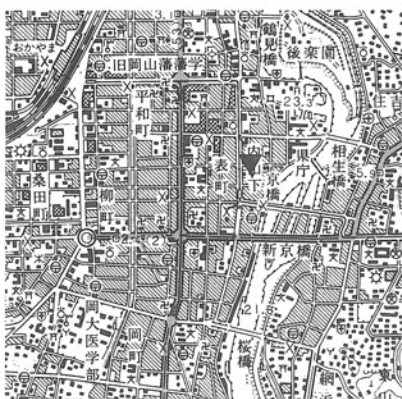




(岡山南部)

岡山・岡山城二の丸^{おかやまじょうにまる}(中国電力変電所)遺構

- 1 所在地 岡山市内山下二丁目
- 2 調査期間 一九九六年度調査 一九九六年(平8)四月～五月・十一月～一九九七年三月
- 3 発掘機関 岡山市教育委員会
- 4 調査担当者 神谷正義・高橋伸二・河田健司
- 5 遺跡の種類 城下町跡
- 6 遺跡の年代 中世(一四世紀)・一六世紀後半～現代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

岡山城城下町は、元亀元年(一五七〇)に宇喜多直家が石山城(岡山城の前身)に入ってから、元亀元年～慶長五年(一六〇〇)の宇喜多期、慶長五年～慶長七年の小早川期、慶長七年～寛永九年(一六三三)の前期池田期、寛永九年～明治二年(一八六九)にかけての後期池田期にわたって漸次形成、完

成されたものである。

岡山城二の丸(中国電力変電所)遺構は、岡山城の城下町絵図によれば、大手門を入り東側すぐの戦略上重要な場所にあたり、上級家臣の屋敷が建ち並ぶ一画であった。

今回の発掘調査は、中国電力内山下変電所の建て替え工事に伴い実施されたものである。調査面積は二四四一㎡であり、そのうち北側部分は中国電力内山下変電所建設事業埋蔵文化財調査委員会によって一九九四年七月～九月に調査された(I次調査)。南側にあたる一一六一㎡については岡山市教育委員会によって、一九九六年四月～五月にかけて八六㎡が、同年十一月～翌年三月にかけて残りの一〇七五㎡の調査が行なわれた(II次調査)。

今回紹介する三点の木簡は、一九九六年度のII次調査で、承応三年(一六五四)の洪水砂層の下の粗砂整地層に掘られた二つのゴミ穴(P二三・P二八)から発見されたものである。同じ面で他に、礎石列や石組み遺構なども検出されている。ゴミ穴の時期は、出土した陶磁器や、他の遺構との関係から、一七世紀前半と推測される。

II次調査の調査区内に屋敷を構えていた人物は、宇喜多期および小早川期については詳らかではないが、寛永九年以前の前期池田期の居住者は、池田忠雄期(藩主在位一六一五年～一六三三年)に作成された「寛永絵図」によれば、「福田内膳」の名が見られ、また寛永九年以降の後期池田期については、「慶安絵図」によれば「池田

伊賀守」の屋敷地の一部になっている。福田内膳については、岡山での役職はよくわからないが、国替え先の鳥取での役職は、三五〇〇石取りの番頭である。また池田伊賀守は二二〇〇〇石取りの家老職である。

8 木簡の釈文・内容

P 二三

(1) ・「角行」

・「龍馬」

35×27×11 061

P 二八

(2) ・「 $\setminus$ □式百十式石□斗□□^{〔三カ〕}

〳十五石□斗六升□合

・「 $\square$ 十六□□□□^{〔一カ〕}
八石三斗八升一合七勺

「□□□□□□□□^{〔一カ〕}

「 $\square$ 〳八斗□□^{〔老カ〕}

□□□□□□□□^{〔式斗カ〕}
五斗八升式合七勺

□□□□□□□□^{〔式斗カ〕}

187×(74)×6 061

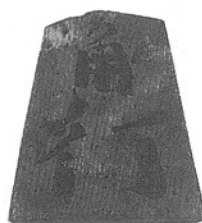
(3) 「 $\setminus$ □□□□□□□□^{〔一カ〕}や」

111×15×2 032

(1)は将棋の駒で、文字は漆によって盛り上がるように書かれてい

る。(2)は曲物の底部あるいは蓋と思われ、ほぼ半分が残存しているが表面の傷や擦れによって、文字が消えて判読できない部分がある。裏側には六行の文字列が見られるが、一行目と二行目、三行目と四行目は文字が一部重なっている。(3)は、上端に左右から切れ込みを入れており、形態から荷札木簡と考えられる。同形のものがI次調査でも出土している(中国電力内山下変電所建設事業埋蔵文化財調査委員会「岡山城二の丸跡(中国電力内山下変電所建設事業に伴う発掘調査報告)」一九九八年 本誌未収)。

なお、住人の比定については岡山市教育委員会乗岡美氏に、木簡の釈読については京都橘女子大学狩野久氏に、それぞれご教示いただいた。(河田健司)



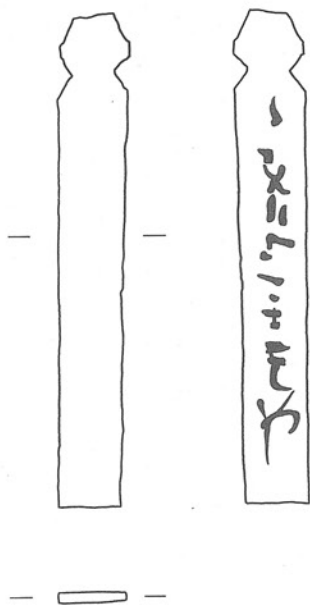
(1)



(3)



(2)



(3)



(2)